



河童の栗氏像

特

報

視座オープンパーティーに出席した篤志さんが栗氏より、当百万石へ訂金一封を貰ってきました。開けてびっくり約17年分くらいの切手代が入っていました。

バンザーイ! 元氣八百八倍! 編集人

写真展「視点」 — 自分の作品について —  
伊藤純雄

田舎から出てきた「里中」(さとなかと読む、スミオさんの入選作品2枚組)のさうりやとり達が東京で取すかしい思いをしているのではないかと心配していましたが、見ると居心地よくしているのを安心しました。

お隣さんは奨励賞の「入植30年」という立派な作品でしたが、「里中」はこの作品ともすく反逆になれたようです。

「里中」の山村にも、「入植30年」の村と同じように若者の姿はありません。日中は人影すら見当りません。五十年が丹精込めて作ったさうりや、出来すぎて商品にはならないでしょう。と、これだけのさうりやを食べるだけの家族がいるわけでもありません。かたかく自然の水だけは豊富な山村のこと。水槽につけておいたのでしょう。いや、突然やって来るかも知れない孫たちをこのさうりや達は待っているのかも知れません。

さて僕がこの写真撮る時、こんなことを考えながら撮ったかどうかそれはよくわかりません。水槽の中で肩を寄せ合っているさうりや達や、突然の来訪、旅人の閑入者におじろいて片隅に寄り合ったり達をほほえましく思っシャッターを切っただけかも知れません。「あんた達この里のお留守番なのか」と声を掛けながら。——これも後からの創作かも知れないなあ。

写した時はそうでもなく、人に見せ、人にいろいろ言われ、例会で採られ、視点に展示されていくうちに、自分の写真でありながら、たまたまその良さもわかってきた好きになってくる写真もあるたなあと思っました。僕の「里中」はそうした写真だったのです。そしてこの写真を写した動機もはっきりしてきました。(後の動機などと言うのも変だけど)このさうりやを作った人、このとりを飼っている人を写したかったのだと、きっとその人達は「入植30年」に写っている人達のような人だったでしょう。と思っながら僕の写真が好きになっていったのです。

※ さてさて今回は視座委員会のたいへんな努力によって、この写真展が見事に構成されていました。これは写真展を見よものにしていただけでなく、作者にとっても、もう一度自分の作品を見直す格好の場ともなっています。特にこの視座展全体の中で、自分の写真が、どんな役割を果しているのかを考へるのにも役立っています。

こうしたことは、会員と非会員の作品を厳然と区別して展示しなければ、あかない他の公募展では、考へられないことであり、全国から集った写真をひとつに構成し、日本の現状を(それがたとえ片鱗にすぎなくても)訴えようとする試みは「視点展」の大きなひとつの特徴になっていると思っました。

※ ここからが本論です。ここまでは自分の作品を看(み)にしているあたりスミオさんらしい配慮(けいりょ)だと思っます。(編集人の臥蛇足)

会員のちよつと、ちよつと、ニース  
神原さん、三交ホームに講師として迎えられ、先日大学の社員を多数前にして、1時間30分にわたる第1回講義をされた。

6月21日、42号線沿いの松信南郊支店にて銀行の商店主を集めて講演する。

小学生・中学生毎日職員室で立上りて講義してあげたい

左の文章に同封されていた手紙

これか面白いですねと新装版。

このたびは大へんしびれを切らせてお待たせしました。何とか書き上げてほしたところですが、どうしてもまとまらず出来上がったものはこんなもので、編集長もさぞがっかりしていると思っます。できることならボツにしてほしい、これ本音です。

切時間に入水して書くという、なんだかちよつとプロ作家のような気分も味わったようですが、どうもホッとして、(ソウハイマセン...編集人)

やっぱり東さん考案の手紙から抜き書きをしよう方法が、我々には気楽でいいです。原稿を頼まれると、なんとか格好をつけて書こうとするためか全く筆が動かなくなってしまうのです。(ワカルワカル...編集人)そこで、くち直しというが、筆なめしというが、一筆報告ということ、少し気ままに書かせてほしいと思っます。

「東マンリ説」については、座談会での伊藤知也先生の発言と、東さん自身の「入賞者の語るわたしの創作体験」によって、けりかっている問題だが、会場での伊藤先生と土門先生の会話は伊藤「あんた、東の写真がマンリだって言っただって?」「伝文聞いて東さんがしげかかっているというので、オレ、20分も電話にいらぬ電話(笑)損しちゃつたよ」

土門「そうか。(マンリと言ったと書かないと書かない)でも、これ退屈だよ」

伊藤「同じ様式のものを見あきたからね。しかしそんなふうには言っなら、あんたの写真はどう? 大マンリで、すく退屈な写真じゃあない」

土門先生、伊藤先生の顔と「一山一会」を見較べながら終始ニコニコ。手が不自由でなかつたら、頭をかきながらニコニコしたい態度。ここまでの会場の緊張した空気が、此処へ来て、いっぺんに解ける。その証拠にこの場面、シャッターの音、きりりと鳴る。

僕の思うのに(あまり当てにはならないが)土門先生の態度に、東はマンリに落ち入ったという心配するような様子は全然見受けられなかつた。昔ながらく、真面目な東、このへん、ちよつといじめてやれ、それに毎年東の写真の下で、困窮しい顔をしばらくならんのは、やりきれん。今年は少し気軽にやらせてくれ。

と、その水、土門先生は今年、東さんの写真のそばでは、このほか、気遣いが良かったように見受けられた。

それになにより、土門先生が「東はマンリだ」と言ったということには、JRPの若い連中が、喜ぶことしきりで、ではないですか。そして、果年に向けて、大いにハッスルすることも、眼に見えて、います。「東マンリ説」大いによろしいというが、僕の結論。(アゲアゲ、ヨスガ)

ところでマンリとは何か。決て様式が同じだからマンリとは言えない。むしろそれぞれ作家は、それぞれの様式を持っているのが当然。寧ろ進歩しているか、どうか、が問題。様式は同じでも、そこに独創性と新鮮さがあれば、マンリとは言えないし、いくら様式を襲えてみても、独創性と新鮮みが欠けていれば、マンリと言わざるを得ない。

(この項、伊藤先生の言葉、聞きかじりのスミオ学)